

島田修二・百首

奥村一征 選



島田修二

夕されば港に霧の立ちこめて異国兵ゆく声高くひびく

『朝の階段』(未刊)

公園よりみゆる海も空も暗ければ輪郭なして客船点る

ドオミエの夜行車の図を思ひしより混みし乗客俄かに親し

古城址にわれを導く処女にて生きてゐる肩丸く小さく

『花火の星』

少年隊の自刃ののちに生存のひとりのことを思ひめぐらす

葦舟に揺らるるごとく眠る児よ生れ来てただに酸素受けをり

報道のライトがじりじり移り来てわれが眉間の怯懦を焦がす

ただ一度生れ来しなり「さくらさくら」歌ふペラフォンテも我も悲しき

ゆるゆると輪転機ひとつとまりたり病む妻よいま何をしてゐる

聖橋^{（まがはし）}の真中あたりに佇ちどまり言葉絶えたる谷を見おろす

泳へつ声あげぬ子は係累を隔てて病めりギブスの中に

跛行して十数歩を来し子を胸に受けとめしときひとつこと畢る

或る星をみつむる思ひ足病みて童仲間^{（わらわ）}に紛らひゆかぬ子

夜の庭に腕光らせる三輪車空より降り来て置かれし位置に

いつの日か吾子に語らんみづからを焼きし灰より不死鳥は生るる

はるかなる新緑の中に妄想の鬼一匹を見失ひたり

秋の日の翳りのつつむ一本の老杉のごともすくと立てぬか

かなしみの色分けしこときドロップの一粒を子がわが口に入る

『青夏』

病みしゆえ意地強き子に聞のこゑあぐる日あらば聞きて死なんか

瞬間に超特急の全長がいたく寂しく捉へられたり

アジア史に人間の罪誌しつづわれが裡なる兵士老いたり

肩を落し去りゆく選手を見守りぬわが精神の遠景として

嘆きつづ一生は過ぎん積りたる雪の上ふたたび泡雪の降る

街角にもの言ふ鸚鵡と睥め合ふ寂しく充ちてわが私生活

流れゆく雲を一生のごとく見てあきらめ難く立ちあがりたり

ガス室をアウシユウィッツに作りしも人間なればあきらめ眠る

さまざまの角度に映る争鬪の安田講堂裸形のごとし

足を病むわが少年の清しきは父の情に言ふにはあらず

棄てられし一兵として国を棄て夏の焦土を帰りしかな

朝日射す冬の運河に傾きて廃船ひとつ朽ちゆくがみゆ

さくら咲く南房総の小駅に今日の一日の昏るるしづけき

幾百のまなこ累なる夜の街に皆のごとき場所捜しゆく

近づきてまた遠ざかるたましひのむらがるごとく雲はてしなし

音たてて翅搏ち合へる揚羽二羽ひとつとなりて谷に墮ちゆく

『渚の日日』

冬音

跼蹐と杜甫の家族も従きゆきしこのなまぐさきにんげんの列

しぐれ降る夜半に思へば地球とふわが棲む蒼き水球かなし

形容をはばかるまでに白く薄く焼けてしまひし骨拾ひ合ふ

品川に別れし兄は還らざりき還らねばとはのいくさびとにて

こころさし朽ちしゆふか巷まちに出て秀先するとき筆をあがなふ

家といふかなしみの舟成ししよりひとは確かに死へと漕ぎゆく

やすやすと制度に従ふしむらをしぐれに打たせ他人の如し

雨の中運び出されてわが家のピアノがしばし宙に吊られぬ

夢ひとつ現ひとつと歌ひ来て花水木散る庭に酔ひみつ

何をしてゐるのだといふこゑのする 歌を作つてゐると答ふる

屈辱も疲労もやがてなじみゆくわがしむらの闇をうたがふ

和平とふもつとも苦しきたたかひに耐へる顔の映し出されぬ

つづまりはわがたつき歌になしまねはこの生き方を変へんと思ふ

サラリーの語源を塩と知りしより幾程かすがしく過ぎし日日はや

いつびきのけものとなりて出でゆかん職捨つる日に自動ドア開く

行先のなき雨の日を山の辺の花に逢ふべく出でて来りぬ

『東国黄昏』

腰越の丘の上なる道端に火の家ありてわれら住まへり

純白のひかりのなかに溶けゆきし群衆のはて都市の影みゆ

いちめんのほのほのとき夜の街や帰りゆくわが面を照らして

ヴァージニアへ帰りたしとふ歌かなしわがうつし世の帰路に聞くとき

わが子なるをぐなをみなご水浴びてむつみあへるは泪ぐましも

北へ行く列車の裡にきこえる母音のおもき日本のこゑ

谷戸の岩粗きに障り思ひ遣るオデッセウスの十年の旅

としつきに似たる水嵩わが前を通り過ぎゆくわれを越えゆく

歌集なく名の無き母の歌などを折折にして思ひ出づるも

人間の脆さやさしさ秘むるがに小林秀雄氏駅頭に立つ

限りなく死は続くべしひとつつ頭蓋を支へ階くだる人ら

二人子に若き日のわれら語りつつ吾妻はやつひに涙ごゑなり

鳥けものしづまりはてし冬葦原、歌出づるまへの茫漠にをり

夕映をうつせるグラスのくれなるのとはとこしへのごときかがやき

過ぎゆきし時のひびきを聞くことし岩近き島灯点りはじむ

残生をかけてなすべき何やある歌の一首をなすことの外

遂げ得ざる死の累累と続くなかおほよそは遂げし君とおもへり

公園に一对の石の白鳥がありし日のまま向き合ひてあり

あたらしき年の晨に思ふかないまひとつ宇宙あるといふ説

夕昏るる冬の一日過ぎゆくは昨にもまして耐へがたかりき

誰と知らず去りゆく後姿ゆめにみし春のあしたの悲哀あたらし

拭ひ得ぬ恥にし似たり海軍にわが在りしこと記者なりしこと

白秋も晶子も知らぬ敗戦のちを生きたり浪漫派として

歌詠みて生きよといへりわがあばらつらぬくまでのすずしき声に

辣韭を封じたる瓶置く部屋に夏の部厚き歳時記ひらく

睡蓮の花ひらきたりしまらくのひとりこころの器なしつつ

あたらしき生姜を挿ればこの夏の地霊かそけくわれに添ひくる

長かりし夏を刻みて過ぎゆくか遊びにも似てはだらなす雲

海に向く高校前の無人駅電車を待てるのみのうつしみ

地に落ちていのち探れるものどちのひとつ柄の実拾ひあげたり

あかときはいまだにとほし高窓にもつとも昏き空を仰ぐも

言ひがたくうれしきことぞ英国直轄植民地アジアに還る

百歳の白秋が来て指し示す大静寂の昭和終末

雪のみち歩むをとめの穿く沓のほかに罪を帯びそむるみゆ

『草木國土』

ことば、こゑしづめ果てたる霧の中テクノボリスの白きかがやき

歌よみてながらへしわれ炎天に身体髪膚ひびかせてゆく

忘却に似て湾内に戦争を知らざるタンカーひとつ置きたり

文芸をたつきとなせばあはれあはれ悪霊のこゑ聞くことのあり

その祖母の柩送るとわが息子二十七歳声あげて哭く

いくたびも名を呼びしとぞマイクにて呼ばれしといふわが名さびしも

あらはなる生おもむろにしづめつつ草木國土冬に入りゆく

守護職が賊軍になりゆく過程手記といへども心たかふる

あたらしき紅茶淹れたりわたなかの貿易風のほひたつまで

象徴の弥果てにして担ぎたる幾十の足の遠ききてゆく

みじかかる一生にあらざりありて幾百の富士われを励ます

をりふしの心に沁みて回送の連結車ゆく夜を点して

硝子戸の内に見てゐつ草木また鳥獣らの分かれ生くるを

満天の星を見んかな限りなき過去より届く星のひかりを

奔りゆく馬うつしく立ちどまりなほうつくしく若ければ馬

神神のやどれる夜を直立てる無花果は昏き葉を垂らしたり

歌の表記・ふり仮名は原則として歌集に準拠しています。

島田修二の歌集『朝の階段』（未刊）『花火の星』『青夏』『冬』

音『渚の日日』『東国黄昏』『春秋帖』に最新歌集『草木國土』

を加えた中から代表作とも言ふべき百首を選びました。

抒情の自立は島田修二のつとに言うところですが、その自立とは、いかなる外因にも左右されない一人一人の歌人が自主的に作り出す抒情であり、すなわち典型であります。この抒情は、対象の知的な把握と太い情念の渾然一体となったところから絞り出されるものでありましょうが、あくまでも日々

の現実を引き付けての浪漫であるところに特徴があります。

さらに言えば、宮格二の「生の証明」とも重なり合うところがあります。

作品を繰り返し読めば、抒情の自立はおのずと感じられますが、新聞などに見られる作者の評言を読むことも島田修二の短歌を理解する上で大切でしょう。日々混迷を深める中、抒情の自立はさらに重みを増すと思われれます。

奥村一征（おくむら・かずゆき）『青藍』会員